



アスピアス!

JFA



JFAサステナビリティレポート
2022-23



公益財団法人日本サッカー協会
社会貢献委員会委員長

日比野 克彦

人類が誕生しておおよそ30万年、人が文化を生み出してきたのが2万年、私たちはその線上に生きている。スポーツの歴史は5,000年、サッカーは150年。国連加盟国は193、FIFAは208。現代において様々な社会的課題があり、世界のあらゆる機関はこれに取り組んでいる。サッカーの役割、サッカーの可能性、サッカー協会の役割、サッカー協会の可能性。地球と共に日々を過ごしている生命が今、未来に危機を感じている。その課題に対してJFAはこれからもサッカー文化を通して取り組んでいきます。

役職は制作当時のものです。

目次

社会貢献委員長ご挨拶	2
目次	3
JFAの理念・ビジョン・約束2050	4
アスパス！と重要課題	5
タイムライン	6
このレポートについて	8

サッカーファミリーと紡ぐ 重要課題の ストーリー



ESGデータ集（GRI対照表）	35
パートナーシップ・国際イニシアチブ	37
JFA関連組織図	38
JFAガバナンス体制図	39
JFA中期計画2023-2026	40
社会貢献委員会	41

環境 10

ゴミを減らし資源を大切にする	11
サステナブルサポーターズ	12
温室効果ガスの排出量算定	13
組織全体の温室効果ガス排出量算定	14

人権 15

女性のエンパワーメント	16
誰も取り残さない競技観戦環境	17
スタジアムのバリアをなくす	19
センサリールーム 東京藝術大学との連携	20

健康 21

グラスルーツフットボール	22
ダイバーシティ&インクルージョン	23
セーフガーディング	24

教育 25

サステナブルな社会の発展に貢献する人材育成	26
-----------------------	----

地域 27

Think Globally, Act Locally.	28
いつでも起こるかわからない災害への備えをスポーツの力で！	29

サッカーの価値を可視化する	30
社会的インパクト評価とSROI	31
仲間とつながる	
新パートナーシップ「仲間には夢がある。」	32
誰もが参加できるクラウドファンディング	33

JFAの理念

サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、
人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。

JFAのビジョン



サッカーの普及に努め、
スポーツをより身近にすることで、
人々が幸せになれる環境を作り上げる。



サッカーの強化に努め、
日本代表が世界で活躍することで、
人々に勇気と希望と感動を与える。



常にフェアプレーの精神を持ち、
国内の、さらには世界の人々との
友好を深め、国際社会に貢献する。

JFAの約束2050

2050年までに、すべての人々と喜びを分かちあうために、ふたつの目標を達成する。

1. サッカーを愛する仲間=サッカーファミリーが1,000万人になる。
2. FIFAワールドカップを日本で開催し、日本代表チームはその大会で優勝チームになる。





アスパズと重要課題



「アスパズ！」は“地球(earth)の明日(未来)のために私たち(us)がつなぐパス”の意を含めた造語で、サッカーファミリーが世代や時代を超えて“パスを繋いでいく”という強い決意を表現しています。ロゴには地球でできたサッカーボールが描かれ、サッカーファミリーが人々や動物、環境などのすべてと一つのチームとなって、地球の明日をつくっていくことをイメージし、制作しました。



環境



人権



健康



教育



地域

JFAはサッカー競技を統括する唯一の団体としての社会的責任を踏まえ、これまでも関係する団体とともにさまざまなサステナビリティに関する活動を推進してきました。

2021年に創立100周年を迎えたJFAは、次の100年に向けて「環境、人権、健康、教育、地域」の5つの重要課題を設定し、戦略的に施策を推進しています。本レポート中においては、関連の重要課題を示すアイコンを各活動ごとに表記しています。

タイムライン

2022

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

6月4日

アスパス！ビーチクリーンを実施



7月8日

女子サッカー応援プロジェクト
「JFA Magical Field Inspired by Disney」発足



11月～12月

日本代表 (SAMURAI BLUE)
FIFAワールドカップカタール2022



1月27日

「アスパス！グッズ」発売開始



6月1日

天皇杯2回戦@大分
フードドライブを実施



7月

ナショナル・フットボール・フィロソフィーとしての
Japan's Wayを策定



12月10日

JFA×KIRIN
キリンファミリーチャレンジカップ
初開催



11月

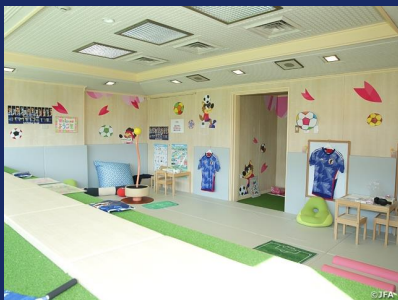
日本代表応援プロジェクト
「サステナブルサポーターズ」



タイムライン

3月

キリンチャレンジカップ2023
センサリールームの設置



6月26日

JFAハウス移転



9月～10月

第4回ろう者サッカー世界選手権大会準優勝
サッカー日本代表と同じデザインのウェアを着用



©日本ろう者サッカー協会

2023

1月

2月

3月

4月

5月

6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

～1月

中央大学とのアスパス！ 協働プロジェクト



6月10日

MOVE FOR THE PLANET
アスパス！ ウォーキングフットボール



9月24日

なでしこジャパン
「JFAなでしこひろば」へ初参加



12月6日

JFAクラウドファンディングリリース

つながれ、みんなの夢へ。
JFA
CROWD
FUNDING

このレポートについて

背景

JFAはサッカー競技を統括する唯一の競技団体としての社会的責任を踏まえ、「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念を掲げています。JFAは47都道府県サッカー協会、9地域サッカー協会、Jリーグ、各種連盟からなる加盟団体や、価値観や目標を共有する様々なパートナーとの活動を通じて、社会の発展に貢献しています。このレポートは、JFAがサッカーファミリーや様々なパートナーとともに実施または連携する様々な持続可能性（サステナビリティ）に関する活動（アスパス！）の情報について、ステークホルダーの皆様と共有し、透明性のある、効率的な組織運営につなげることを目的に作成するものです。

SDGsとの関連

このレポートは、SDGsターゲット12.6において求められている、持続可能性に関する情報が含まれた定期報告にあたります。

スコープ

2019年より、社会貢献委員会の活動を中心に年に1回報告を行ってまいりましたが、JFAとして社会の発展に貢献するための取り組み（社会貢献活動）をより強化し、重要課題の設定等を通じて組織全体に統合する動きを踏まえ、2021年度は「社会貢献活動レポート」として制作したもので、今回から「サステナビリティレポート」として発信します。

このレポートでは、「社会貢献活動」とそのインパクトを包括的にご紹介しますが、特にアスパス！の5つの重要課題を基に、JFAやステークホルダーにとって関連の大きい活動を中心に報告します。そのため、より詳しい情報や最新情報については、JFA公式ウェブサイト「JFA.jp」や関係するウェブサイトもあわせてご参照ください。

報告対象は、特に断りが無い限り、2022～23年度（2022年1月1日から2023年12月31日）の2年間にに関するものとしています。

構成

このレポートは、主に3つのパートで構成されます。

- ・はじめに（ご挨拶、組織の目標、レポートの位置づけ）
- ・重要課題別（環境、人権、健康、教育、地域）
- ・各種データ

ねらい

従来は、一つ一つの「活動」にフォーカスして報告していましたが、前回よりアスパス！の重要課題に沿って編集しています。レポート全体を通して、JFAのみならず各団体や各地域においても同様に取り組みが広がることが期待されるようなものについての実践例を掲載しています。これにより、アスパス！を意識した創造的な新しいアイデアやアプローチが、ステークホルダー間の対話を通じて次々と生み出され、新たな事業が実施されたり、人々の行動に変化が次々と生じていくことを期待しています。



サッカーファミリーと紡ぐ 重要課題のストーリー



環境

サッカーにおける様々な活動で
気候変動による熱中症等を防ぎ
温室効果ガスや廃棄物の削減で
わたしたちの自然環境を守ろう

▶ 10



人権

差別や暴力のない自由で平等な
スポーツの世界を一緒に築いて
年齢・性別・障がいの有無等に
関係なく輝ける社会をつくろう

▶ 15



健康

スポーツの楽しさを感じられる
グラスルーツサッカーを広めて
心身ともに健康的でいつまでも
元気と笑顔溢れる人生を送ろう

▶ 21



教育

スポーツで社会をよくするため
必要な知識や技術を身につけて
サッカーが持つ魅力を活かした
持続可能な未来を築いていこう

▶ 25



地域

持続可能性に配慮して行動する
地域の人々の様々なつながりを
サッカーを通じてつくることで
私たちの住みやすい街を守ろう

▶ 27



環境

Environment

サッカーにおける様々な活動で
気候変動による熱中症等を防ぎ
温室効果ガスや廃棄物の削減で
わたしたちの自然環境を守ろう

なぜ重要なのか？

SDGsは世界的、地球的な課題解決のための目標です。環境省によると、SDGsの17のゴールのうち13は直接的に「環境」に関連するもので、残り4つも間接的に関連することから、SDGsはすべての領域で環境に関連しています。このうち、**ゴール13の「気候変動に具体的な対策を」とゴール12「つくる責任つかう責任（持続可能な消費と生産）」**は、国の重点施策とも密接に関連しています。



環境



人権



健康



教育



地域



気候変動に具体的な対策を

気候変動については、**温室効果ガス排出を削減する「緩和」**の取り組みが急務となっています。菅内閣は「2050年カーボンニュートラル宣言」を行いました。**脱炭素社会の実現**が社会経済を大きく変革し、投資を促し、生産性を向上させ、産業構造の大転換と力強い成長を生み出す鍵となるものと位置づけ、**脱炭素イノベーション推進**のための2兆円の基金創設、**再生可能エネルギー**の拡充、**脱炭素ライフスタイル**への変換、**ゼロカーボンシティ**（脱炭素地域創出）などの施策を行っています。また、これら気候変動の「緩和」のみならず、2018年に施行された気候変動適応法により、温暖化の進展により顕著となっている**熱中症・感染症**や大型台風等の**異常気象**の影響を軽減する「**適応**」の推進も求められており、**熱中症対策**も気候変動対策の一つに位置づけられます。これらの気候変動への適応、緩和、影響軽減、早期警戒に関する**教育（ESD）**、**啓発**なども、ゴール13のターゲットとされています。スポーツは、今後気候変動対策のために社会が大きく変化する時代において、取り残されがちな人々にフォーカスし、社会全体を牽引する大きな原動力となることもできます。



持続可能な生産と消費

もう一方の持続可能な生産と消費は、主に生産・消費のライフサイクル全体を通して、**天然資源や有害物質の利用削減、廃棄物や汚染物質の排出削減**を目指しています。一人あたりの**食品ロスの半減**、生産やサプライチェーンにおける**フードロスの削減、発生量の削減**や**再生利用（リサイクル）・再利用（リユース）**による**廃棄物の削減、持続可能性に関する定期報告、浪費的な消費を推奨する補助金・化石燃料に対する補助金の合理化**など、取り組みの領域は非常に多岐にわたります。近年は、**海洋プラスチックごみ**の発生も大きな問題となっており、**ペットボトル水平リサイクル率の向上**も大きな課題です。**エシカル消費**は、国の消費者基本計画において、「**地域の活性化や雇用**なども含む、人や社会・環境に配慮した消費行動」とされています。消費者へ環境に配慮した商品であることを示す**環境ラベリング制度**は国際標準化機構（ISO）や環境省がガイドラインを定めています。企業も**CSR調達**により持続可能な成長につなげています。

ゴミを減らし 資源を大切にする



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 12.2,12.4,12.5 / GRI 102-55,306

ミッション

スタジアムや海のゴミの回収し、
資源を大切にする意識を持てるようにする。

目標

サッカーの活動を通じた廃棄物の削減

環境に配慮した持続可能なサッカーの応援

海洋プラスチック削減のためのビーチクリーン

ハイライト

サステナブルサポーターズ

FIFAワールドカップカタール2022のSAMURAI BLUE（日本代表）の応援プロジェクトの一環として、スタジアムのゴミから作られた折り紙メッセージカードでメッセージを届ける取り組みと、試合後の清掃活動で活用するための環境に配慮した素材のゴミ袋を配布する取り組みを行い、持続可能な応援環境づくりに努めた。

海洋プラスチック

アディダスジャパンの「RUN FOR THE OCEANS」と連動し、ビーチクリーン活動とサッカー日本代表の練習見学をセットにしたイベントをJFA夢フィールドで開催した。

主な指標

ペットボトルの水平リサイクル推進	2020年度 15.7%
日本におけるペットボトルからペットボトルへの水平リサイクル率	▼ 2022年度 29.0%
JFAハウスにおける実証実験	
期間中の3分別実施率（2021年度）	93%
JFA夢フィールドにおけるビーチクリーン	
実施回数（2022年度）	2回

今後に向けて

試合会場やオフィスでのゴミ分別・回収の継続
脱炭素の取り組みにおけるサッカーファミリー全体への浸透

実践例

サステナブルサポーターズ



環境



人権



健康



教育



地域



日本代表戦でのアスパス！の取り組み

サッカー日本代表戦の各試合会場での取り組みについては、JFA公式ウェブサイトでお知らせしています。

https://www.jfa.jp/national_team/ASU_Pass/



声援を永遠に。

SUSTAINABLE SUPPORTERS

4年に1度、世界中がフットボールに熱狂する。そのサイクルをいつまで私たちは続けられるだろう。気温上昇が続けば、海の下に沈んでしまう競技場がある。猛暑で昼間にプレーできなくなる街がある。未来のために、今からできることはないだろうか。そんな思いがJFAが新たに始めた

SUSTAINABLE SUPPORTERS

(サステナブル・サポーターズ)

サッカー日本代表の応援に必要なすべてのものを、リサイクル素材で贈うことを目指す活動だ。今日の代表を応援することが、サッカーを愛する未来を応援することになる。サポーター同士、つながるからこを揃えていける。新しい循環の景色をつくりだす。まずは、サッカー界から排出される紙ゴミを再生する「折り紙プロジェクト」から。スタジアムの興奮をいつまでも、声援を永遠に。



スタジアムのゴミから作られた折り紙
https://www.jfa.jp/samuraiblue/bus_caravan_2022/leaflet.pdf



FIFAワールドカップカタル2022の日本代表応援プロジェクトの一環として、スタジアムのゴミから作られた折り紙メッセージカードでメッセージを届ける取り組みが行われた。応援の形をサステナブルにする取り組みとして、全国のサッカーファミリーと選手とをつなぐ役割を担った。

海洋プラスチック削減のためのビーチクリーン
<https://www.jfa.jp/news/00029884/>



日本代表ユニフォームでビーチクリーンとSAMURAI BLUEの練習見学を行うイベントに、176人が参加した。



応援と試合後の清掃のための環境に配慮したポリ袋
<https://www.jfa.jp/news/00031067/>



環境に配慮した素材の青色のポリ袋を制作し、FIFAワールドカップカタル2022のサポーターへ配布した。スタンドをサマライブルーに染め、試合後の清掃活動で活用いただいた。アラビア語・英語・日本語の3か国語で「ありがとう」の文字が記され、サッカーに関わる全ての方々への感謝の気持ちを表すものとなっており、制作にあたってはサポーターからのご意見・ご要望を聞きながら進められた。

試合会場等におけるペットボトル3分別を継続的に実施

JFAは一般社団法人全国清涼飲料連合会と東京都が実施する「ボトルtoボトル東京プロジェクト」の取り組みに引き続き賛同し、ペットボトルのキャップとラベルやゴミの分別（3分別）を推進。役職員の意識向上を図った。サッカー日本代表の試合会場において、キリングループとともにペットボトルの3分別回収を実施し、ファン・サポーターへの啓発を図っている。

温室効果ガス排出量算定



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 12.6,13.2/GRI 102-55,305

ミッション

JFA事業全体の温室効果ガス排出量を算定
カーボンニュートラル実現のための課題を検討

目標

気候変動への対応

温室効果ガスの算定と削減

熱中症等の気候変動による影響の緩和

ハイライト

JFAでは、天皇杯JFA全日本サッカー選手権大会において、2021年1月の第100回大会決勝戦および同年12月の第101回大会決勝戦の温室効果ガス排出量を算定したが、2022年度は東京都市大学伊坪徳宏研究室の協力を得て、コロナ禍の影響を受ける前の2019年度において、JFAの組織全体を対象とした温室効果ガス（GHG）排出量の算定を初めて実施した。

スポーツ界全体の環境への取り組みは様々な形で行われているが、温室効果ガスの算定はまだ進んでいない。今後の気候変動の影響を緩和し、地球温暖化の原因となる温室効果ガスの排出を抑制できるようにするため、JFAの活動全体での取り組みが求められている。

主な指標

JFA全体の排出量（GRI-305）

2019年度 **3.3万** t-CO₂e
(2023年度に調査を実施)

今後に向けて

サプライチェーン全体を通じたあらゆるレベルでの
温室効果ガス削減の取り組みの継続・進展

実践例

JFAの組織全体における温室効果ガス排出量算定



環境



人権



健康



教育



地域

JFA全体の排出量 (GRI-305)

2019年度 **3.3万** t-CO2e

JFAの組織全体における温室効果ガス排出量インベントリ



目的：JFAの組織全体における温室効果ガスのインベントリ（一覧）の分析を行い、環境へ与える負荷を把握することで、今後の排出削減の検討材料とする。

方法：東京都市大学伊坪教授の研究室にご協力いただき、GHGプロトコルに基づく、直接的・間接的・その他の排出項目と、ライフサイクルアセスメントに基づく全体の排出項目を検討し、財務（購入額）データと排出源単位（排出係数）をかけた二酸化炭素換算の排出量を算定。

システム境界：新型コロナウイルスの影響を受ける前の2019年度の利用可能な財務情報を用いて算定。利用可能な財務情報が限定されるため、代表的な事業・活動における排出項目を推定し、JFAの組織に起因する活動全体において網羅的に把握することを目指した。

結果：JFAの組織全体の活動を、「輸送・宿泊」「物品・サービス購入」「施設運営・利用」「広報・プロモーション」「その他」に分類し、それぞれの予算科目に応じて活動量を推定し、排出原単位を設定したところ、以下の通りとなった。

輸送・宿泊	1.53万t-CO2e (45%)
物品・サービス購入	1.11万t-CO2e (34%)
施設運営・利用	0.33万t-CO2e (10%)
広報・プロモーション	0.21万t-CO2e (6%)
その他	0.17万t-CO2e (5%)
計	3.35万t-CO2e

このうち、輸送・宿泊の内訳は以下の通り。

移動	1.08万t-CO2e (71%)
宿泊	0.33万t-CO2e (22%)
その他	0.12万t-CO2e (7%)
計	1.53万t-CO2e

今後の取り組み：輸送・宿泊における排出が全体の半分近くを占めることから、移動の必要性の見極めと環境に配慮した移動手段の検討が必要。物品・サービスにおいては印刷製本に関する排出が3割と最大。コロナ後においてもオンライン会議の活用やペーパーレス化などが可能な場合は継続することが求められる。

人権

Human Rights



差別や暴力のない自由で平等なスポーツの世界を一緒に築いて年齢・性別・障がいの有無等に関係なく輝ける社会をつくろう



環境



人権



健康



教育



地域



人や国の不平等をなくそう

人の不平等をなくすための中心的な考え方は、「**ダイバーシティ&インクルージョン**」です。年齢、性別、障がいの有無、人種、民族、出自、宗教、経済的地位、その他**その人が置かれている状況にかかわらず**（ダイバーシティ）、すべての人々が社会的にも経済的にも**排除されること無く**包摂されている状態（インクルージョン）になることをいいます。スポーツは誰もがすぐに仲良く楽しむことができるツールとして、共生社会実現に影響を与え（**エンパワーメント**）促進すること（**プロモーション**）ができます。



貧困をなくそう

貧困には、最低限の日常生活もままならない「**絶対的貧困**」と、その国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態である「**相対的貧困**」という概念があります。日本では、相対的貧困の割合を半分にし、格差をなくすることが大きな目標です。また、**子どもの貧困**も大きな問題となっています。自覚がなかったり、支援を求めづらい状況もあり、身近にあるにもかかわらず**見えにくい社会問題**です。無料で参加できるイベントなどは、子どもたちの未来を応援することにつながります。



ジェンダー平等を實現しよう

世界人口の半数を占めるのは女性です。**ジェンダー差別**がなくなれば、途上国を中心に世界で起きている、いたたまれない差別に苦しむ人たちが救えるだけでなく、**女性の社会参画**により、各国の経済成長の拡大と社会開発の促進に繋がります。**スポーツに携わっている女性**は、ジェンダーに基づくステレオタイプに挑戦し、人を感動させるロールモデルとなり、男性と女性が平等であると証明し、ジェンダー平等を実現します。

なぜ重要なのか？

国連は、人権の享受のために特別の保護を必要とする女性、子ども、障がい者、移住労働者とその家族、難民、少数者その他の脆弱な立場にある人々に対応した様々な人権法を整備してきました。人権は、「だれも取り残さない」というアジェンダのキーワードに象徴されるように、SDGsのすべてのゴールに盛り込まれており、必ず考慮されるべき重要な課題となっています。

具体的には、**ゴール10「人や国の不平等をなくそう」**において、障がいの有無にかかわらず一緒に生きる社会を目指す共生社会の実現を含んだ平等権が全般的に取り上げられているほか、**ゴール1「貧困をなくそう」**では生存権、幸福追求権が、**ゴール5の「ジェンダー平等を實現しよう」**においては男女平等と女性のエンパワーメントが個別のゴールとして改めて強調されており、いずれもスポーツが貢献できる領域です。

女性のエンパワーメント



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 4.7,5.1,5.5,5.c / GRI 102-8,102-22,102-55,401,405

ミッション

女子サッカーを通じて夢や生き方の多様性にあふれ一人ひとりが輝く社会を実現する。

目標

女性のエンパワーメント原則の取り組み推進

役職員等のジェンダーギャップ解消

ハイライト

サッカー界一丸となって、ジェンダー平等に向けた様々な取り組みが行われている。2020年にJFAとWEリーグは、国連グローバル・コンパクトと国連女性機関（UN Women）による女性のエンパワーメント原則（WEPS）に賛同し、署名した。2021年にはWEリーグが開幕し、女性活躍社会の実現に向けて動き出しているが、JFAの登録者において女性が占める割合は、指導者が3.6%、審判が5.4%と大変低い。指導者では、女性を対象とした指導者養成コースを増やす等、女性指導者増加のための様々な施策に取り組んでいる。審判では2022年シーズン、J1、J2リーグで初めて女性審判員が担当し、FIFAワールドカップカタール2022では、山下良美さんが選出された。

▶ **女性のエンパワーメント原則（WEPS）年次レポート**
https://www.jfa.jp/women/pdf/women_empowerment_report_2023.pdf



主な指標

ジェンダーギャップ指数（WEF）

2022年度	0.650	116位 / 146カ国中
2023年度	0.647	125位 / 146カ国中

JFA役職員等の女性割合（GRI102-8,102-22）2023年12月時点

役員	17%	女性5人 / 30人中
各種委員会委員	16%	女性29人 / 183人中
事務局管理職	16%	女性10人 / 62人中
事務局正職員	33%	女性67人 / 204人中

JFA登録者の女性割合（GRI102-55）2023年12月時点

サッカー選手	6.2%	女性51,677人 / 830,607人中
サッカー指導者	3.6%	女性3,346人 / 93,078人中
サッカー審判員	5.4%	女性14,654人 / 271,027人中

誰も取り残さない 競技観戦環境



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 11.7 / GRI 102-55,406

ミッション

競技観戦においても誰も取り残さない
心のバリアフリーが広がる社会を作る

目標

スタジアムでの競技観戦におけるバリアをなくす

発達障がい等で大きな音が苦手でも
安心して観戦できるセンサールーム運営

スタジアムにおけるバリアフリー調査の実施

視覚障がいの有無にかかわらず試合を楽しむ
ことができる実況解説シートの販売

ハイライト

天皇杯と日本代表戦において、誰も取り残さない競技観戦環境づくりを目指して、様々な取り組みを行った。新型コロナウイルス感染対策による入場制限等で中止となった会場もあったが、可能な限り実施した。

天皇杯第101回JFA全日本サッカー選手権大会決勝戦では、東京藝術大学との連携によりセンサールームのモデルルームを展示し取り組みを広く周知したほか、各試合会場では案内所等で筆談ができることを周知し、安心してご来場いただけるように努めた。

主な指標

スタジアムでの競技観戦におけるバリアをなくす（2022-2023年度）

	天皇杯	日本代表戦
センサールームの運営	2試合	4試合
実況解説シートの販売	0試合	10試合
知的・発達障がい者席	0試合	2試合
経済的に困難な方々の招待	2試合	1試合
バリアフリー調査	0試合	4試合

今後に向けて

どのスタジアムでも実施できる継続的な運営体制の構築
各種パートナーとの連携強化

誰も取り残さない競技観戦環境



環境



人権



健康



教育



地域



一瞬の感動を、一緒に感動に。

一瞬の感動を、一緒に感動に。－視覚障がい者席のご案内－

https://youtu.be/rvdKtTa0_5M



とにかく声をかけあう

なにかお手伝いできることはありますか？

<https://youtu.be/P7fJHYju2qk>



各種啓発映像の作成

障がい者に対する理解促進と、スタジアム観戦時のバリアをなくすため、日本代表チームやサポーターと共に障がい者サポート啓発映像や視覚障がい者席の紹介映像を作成し、スタジアム等で放映を行った。

実践例

バリアフリー調査 スタジアムのバリアをなくす



環境



人権



健康



教育



地域



車椅子席でのサッカー日本代表戦観戦状況を調査

スタジアム観戦では、障がいのあるお客様にとって様々なバリアがある。そのバリアを少しでも取り払い、だれにでも試合観戦を楽しんでいただける取り組みを行っている。

バリアフリー調査

スタジアム内にどのようなバリアがあるのか、実態を把握するために、全国各地で開催された日本代表戦を元にバリアフリー調査を行った。たとえば、会場外において、JFAグッズが販売されるJFA STORE店では多くのお客様が並ぶため、列に長時間並ぶことが難しいお客様にとっては、並ぶことにハードルがあった。インフォメーションや各ブースでは、「筆談できます」のボードを掲示し、耳が聞こえない・聞こえにくいお客様へ配慮している一方で、用意しているメモ用紙が小さく文字が見つらなくなってしまうことがあった。長い間日本代表を応援してくださっている車椅子のお客様からは、車椅子席を用意してくれていることは嬉しいが、ゴール裏など好きな場所で観戦したい声も頂いた。

ハード面ではスタジアムに左右されるため早い対策が難しい一方で、ソフト面では、当日スタッフの意識づけや、点字ブロックの上にプロモーションブースを設置しないなど、使用する備品の工夫をすることで対応できるものもあった。今後も障がいのあるお客様をはじめ何かしらの困難を抱えるお客様が少しでもバリアを感じないように引き続きバリアフリーな観戦を目指して取り組んでいく。

視覚障がい者向け実況解説シート

2021年3月から、視覚障がいのある方もサッカー観戦を楽しんでいただけるように実況解説シートのチケット販売を開始した。本シートで観戦されるお客様にスタジアム内専用ラジオから生放送で実況と解説をお届けし、試合の状況を細かく具体的にお伝えし、試合の状況を観ることができない、または観ることが難しいお客様でも試合を楽しんでいただけるようにした。

知的・発達障がい者席

2023年度から日本代表戦において、知的・発達障がいのある方も気軽にスタジアム観戦を行っていただけるよう、知的・発達障がい者席を販売した。実際に、この取り組みによって付き添いのご家族のご負担を減らし、みんなで楽しんで試合観戦していただく姿が見られた。

障がい者のプレマッチセレモニーの参加と介助者の募集

日本代表戦において、障がい者のスポーツ観戦を増やすために、車いすをご利用の方、または、視覚障がいのある方に、プレマッチセレモニーに参加いただいた。また、日常においてこういった取り組みが特別なことではなく、普通に誰もがサポートができる世界を実現するために、セレモニーに参加する介助者はサポーターから募集することとした。

実践例

センサリールーム 東京藝術大学との連携



環境



人権



健康



教育



地域



2018年に国立大学法人東京藝術大学と「芸術およびスポーツを通じた社会貢献活動の推進に関する連携協定」を締結し、特別講座「DOOR (Diversity on the Arts Project)」をスタートさせてから6年が経過。最初の3年間は、主にJFAの社会貢献活動を題材した映像作りを中心としていたが、2021年度からは「センサリールーム」にフォーカスし継続して取り組んでいる。2022年度以降は、センサリールームの継続的な実施につなげるため、本プロジェクトで作ったツールを活用し、地元クラブの協力も得て、2022年度は2試合、2023年度は3試合のサッカー日本代表の試合会場で実施した。

これまでの授業においては、発達障がいに関する専門家の講義を受けた受講生らが、自宅にある廃材を持ち寄り、過ごしやすい観戦環境をつくるグッズを考え、藝大美術館での「SDGs x ARTS展」に作品を展示。その後、作品を実用的にするため、藝大OB・OGらの協力も受け、子どもたちが跳んだりはねたりしても十分に耐えられる強度を備え、触り心地や遮音・遮光なども考慮した作品ができあがった。

天皇杯決勝においては、2021年12月19日の第101回大会から授業の一環として毎年継続して実施しており、参加可能な受講生が国立競技場で観戦家族を出迎え、センサリールームを盛り上げている。



▶ プロジェクト詳細
https://www.jfa.jp/social_action_programme/news/00031918/





健康

Health

スポーツの楽しさを感じられる
グラスルーツサッカーを広めて
心身ともに健康的でいつまでも
元気と笑顔溢れる人生を送ろう

なぜ重要なのか？

世界保健機関（WHO）憲章において、健康とは「病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態」とされています。
スポーツがより身近に、みんなのものになることで、誰も取り残さずに幸せになれる環境を作り上げることができます。より多くの人々が活動に参加することで、健康の重要課題に直接的に関連する**ゴール3「すべての人に健康と福祉を」**のみならず、あらゆるゴールの達成に寄与することができます。



環境



人権



健康



教育



地域



すべての人に健康と福祉を

健康と福祉においては、まず**ユニバーサルヘルスカバレッジ（UHC）**や**高い保健医療へのアクセスの実現**の必要性が叫ばれています。世界人口の半分、約36億5千万人は、**基礎的な保健医療サービス**を、必要ときに負担可能な費用で受けることができません。これらの現状を、教育やスポーツ活動の機会を通じて、**多くの方々に認識してもらう**ことが非常に大切です。

また、**薬物乱用やアルコールの有害な摂取、たばこの規制**に限らず、**暴力・暴言の根絶、差別・いじめ・虐待からの保護、良い指導者の養成と有資格指導者の配置、熱中症対策**、だれでもサッカーを楽しめる環境のための**障がい者サッカーの推進**などは、ユニセフの「子どもの権利とスポーツの原則」に基づく「サッカーファミリースポーツ安全保護宣言」でも謳われています。

運動不足は、喫煙、高血圧に次いで、病気による死亡を招く3番目の危険因子とされています。スポーツを継続し「**運動不足**」を解消することで、**生活習慣病、高齢者の運動器症候群（ロコモ）、認知症の予防**につながります。こうした全国的、世界的な**健康危険因子を早期に警告し、緩和し、管理**することも、このゴールのターゲットの一つです。

このほかのスポーツの課題は、健康に関連する領域ではあるものの、別の重要課題やSDGsの課題に直接的に関連します。

人権：貧困問題への対応（ゴール1）、**年齢、性別、障がいの有無などに関わりなく一緒に**（ゴール10）

教育：若年層へのアプローチ（ゴール4）、**質の高い指導者の養成**（ゴール4）など。



グラスルーツ フットボール



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 4.7,4.a,5.2,16.1,16.2 / GRI 102-17,102-55

ミッション

だれもが、いつでも、どこでも
サッカーを身近に楽しめる環境を作る

目標

だれもが、いつでも、どこでも
サッカーを身近に楽しめる環境

地域のコミュニティづくりへの貢献

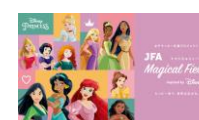
新しい一歩を応援するフェスティバル

ハイライト

JFAは2014年5月15日に「JFAグラスルーツ宣言」を行った。
グラスルーツサッカーを通じて、スポーツを一部のプロ・エリートによるものに留めることなく、だれもが、いつでも、どこでも、もっと身近にスポーツを楽しむことができ、幸せになれる環境を作り上げることを目指している。

JFAでは、特にキッズ・女子・シニアの重点3領域において、これまでサッカーを経験したことがなかった方々や、年齢や障がいなどでサッカーを楽しむことを諦めていた方々に対する、ウォーキングフットボールやファミリーサッカーフェスティバルなどの取り組みを新たに始めている。

JFA公式アプリ「JFA Passport」を利用して、一人ひとりに合ったイベントを見つけ、参加できるようにするデジタル施策は、2050年までにサッカーファミリーを1,000万人にするという普及目標達成のための「メンバーシップ」の一環としても積極的に推進している。



主な指標

JFA Passportダウンロード数 (2023年12月末)

384,790人

JFA Passportを利用した普及イベントへの申込 (2023年)

12,626人

今後に向けて

- 魅力的なフェスティバルの開催
- 運営を支える人材の養成
- 地域のクラブなどでの継続的な場作り

ダイバーシティ& インクルージョン



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 4.7,11.7,16.7 / GRI 102-55,404,405,406

ミッション

年齢、性別、障がいの有無にかかわらず
誰もがサッカーを楽しめる環境を通じて
共生社会の実現に貢献

目標

障がい者サッカーの取り組み

サッカーを通じた共生社会の実現

JFA公認指導者研修会

ウォーキングフットボールの普及

ハイライト

2021年8月から9月に、第32回オリンピック競技大会および第16回パ
ラリンピック競技大会が開催され、U-24日本代表、なでしこジャパン
(日本女子代表)、ブラインドサッカー日本代表が出場した。JFAは、J
リーグ、WEリーグ、日本障がい者サッカー連盟 (JIFF)、日本ブラインド
サッカー協会 (JBFA) とともに「TEAM FOOTBALL JAPAN 2020」
を結成した。同大会に出場する3チームが史上初となる同一デザインのユ
ニフォームを着用し、試合に臨んだ。

その後、2023年4月よりデフサッカー・デフフットサルをはじめ、ブラインド
サッカー・ロービジョンフットサルを除く障がい者サッカー6団体がサッカー日
本代表と同一デザインのユニフォーム・トレーニングウェアを着用すること
となった。

ウォーキングフットボールは、イングランド発祥の新しいスポーツで、歩いてプ
レーするというルールにより、障がいの有無や年齢・性別・サッカー経験の
有無などにかかわらず、誰もが一緒に楽しむことができる。JFAでは、オンラ
インのルール説明会やコーディネーター講習会を開催し、地域における
ウォーキングフットボールの場作りを行う人材も養成している。

▶ 障がい者サッカー

https://www.jfa.jp/grass_roots/disability/



▶ ウォーキングフットボール

https://www.jfa.jp/grass_roots/walkingfootball/



主な指標

	2022年度	2023年度
JFA公認指導者研修会 (障がい者サッカー)	13回	12回
ウォーキングフットボールコーディネーター講習会	2回	20回

今後に向けて

障がいの有無などにかかわらずだれもがアクセスできる環境の実現

セーフガーディング



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 4.7,4.a,5.2,16.1,16.2 / GRI 102-17,102-55

ミッション

暴力・暴言などを一切許さない「ゼロトレランス」
多くの人々がサッカーの楽しみを享受できるよう
指導者・関係者のつながりをつくる

目標

子どもたちが安心してサッカーに打ち込める環境づくり

JFAセーフガーディングポリシーの策定

ワークショップによる人材育成

ハイライト

JFAは毎年9月に「JFAリスペクトフェアプレーデイズ」を設定し、リスペクトの大切さや、差別や暴力・暴言のない世界を目指す取り組みを行っている。

2022年度のシンポジウムでは、JFAが取り組んでいる「ウェルフェアオフィサー制度」「セーフガーディングワークショップ」「エモーションプロジェクト」の詳細および好事例が紹介された。

2023年度のパネルディスカッションには、日本バレーボール協会の事例紹介があり、同じ指導内容でも選手側と指導者側で正反対の捉え方がされているという事例が紹介された。

▶ JFAセーフガーディングポリシー
https://www.jfa.jp/respect/safe_guarding.html



▶ JFAセーフガーディングワークショップ
<https://www.jfa.jp/news/00027857/>



主な指標

セーフガーディングワークショップ **47**都道府県

今後に向けて

加盟団体（都道府県サッカー協会等）における取り組みの推進
JFAによるサポート（コンプライアンス研修会等）の充実



教育

Education

勝てない

あきらめない

スポーツで社会をよくするため
必要な知識や技術を身につけて
サッカーが持つ魅力を活かした
持続可能な未来を築いていこう



環境



人権



健康



教育



地域



質の高い教育をみんなに
教育は、SDGsのすべてのゴールのベースになるものです。ユニセフの報告によると、世界中には、女性であること、貧困世帯や少数民族、障害があるといった理由だけで学校に通えず、教育を受けられない子どもたちが1億7,500万人以上いるとされています。

また、ユネスコの調べでは、読み書きができない大人は約7億5千万人いて、そのうち女性が3分の2を占めるとされています。

すべての人が男女の区別なく、無理なく払える費用で、技術や職業に関する教育を受けられるようにすることが必要です。はたらきがいのある人間らしい仕事（ディーセントワーク）について、新しくビジネスを始められるように、**仕事に関する技術や能力**を備えた若者や大人をたくさん増やすことが求められています。

体力と学力は、相関関係にあることが知られています。小さいときから、**遊びながら動きを覚え、成功体験を得る**ことは、勉強の成績がよくなるだけでなく、その先の人生にもよい影響を与えます。運動をするきっかけは様々ですが、学校での授業や部活動のほか、学校以外でのクラブやサークル、そしてチームで、だれもが**質の高い指導**を受けられるかはとても重要です。そこには、**差別や暴力のない安全な指導環境**が必要となってきます。これらは、すべて「教育」のゴールと密接に関係するものです。

なぜ重要なのか？

教育の重要課題には、指導者や審判員などサッカーそのものを支える人材養成と、その人材養成のために子どもや障がい、男女の差などをよく考えた現場を作る環境整備、そして持続可能な社会の発展のために必要な知識や技術を身につける持続可能な開発のための教育（ESD）などが含まれ、いずれも**ゴール4「質の高い教育をみんなに」**に直接関連しています。ESDは、その内容によって他の重要課題やそのゴールとも関連することになります。

サステナブルな 社会の発展に 貢献する人材育成



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 3.4,3.5,4,8.6,10.2,11.3,11.7,11.a,11.b
GRI 102-55,413

ミッション

夢を持つことや努力することのすばらしさ
サッカーに関わることの喜びを新しい形で届ける

目標

JFAこころのプロジェクト「夢の教室」の開催

JFAスポーツマネジャーズカレッジの開催

指導者・審判の各種講習会のオンライン開催

ハイライト

JFAこころのプロジェクト「夢の教室」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンライン中心となっていたが、現場での活動も徐々に再開した。また、2020年度に始動したオンライン形式も継続的に行い、臨機応変に開催し、子どもたちに夢を持つことや、その夢に向かって努力することの大切さを語った。

JFAスポーツマネジャーズカレッジサテライト講座は、リアル形式とオンライン形式が実施され、双方の良い部分を活かしながら開催し、組織運営の人材を養成している。

また、指導者や審判のさまざまな講習会も、実技を伴うものを除いてオンラインで開催されるものが増え、2023年1月には2年に1度のフットボールカンファレンスがハイブリッドで開催された。

▶ JFAこころのプロジェクト
https://www.jfa.jp/social_action_programme/yumesen/



▶ JFAスポーツマネジャーズカレッジ
<https://www.jfa.jp/smc/>



▶ フットボールカンファレンス
<https://www.jfa.jp/coach/official/footballconference.html>



主な指標

	2022年度	2023年度
JFAこころのプロジェクト	1,622回	1,529回
JFAスポーツマネジャーズカレッジ サテライト講座	7回	5回

今後に向けて

持続可能性に配慮した各種人材育成事業の実施



持続可能性に配慮して行動する
 地域の人々の様々なつながりを
 サッカーを通じてつくることで
 私たちの住みやすい街を守ろう

地域

Local

なぜ重要なのか？

国連によると、世界人口に占める都市人口の割合は、現在の55%から2050年に68%まで拡大すると予測されています。日本においては、世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を迎え、2050年には30万人以上の人口規模を維持できない都市圏が相当数現れることが見込まれています。**ゴール11「住み続けられるまちづくりを」**は、こうした現状を踏まえ、地方行政との協働などによる、地域社会のつながりと安全の確保、イノベーションと雇用促進などを目指しています。環境、人権、教育、健康といった他のすべての重要課題とそのゴールは、地域の課題と密接に関連しており、地域におけるSDGsの取り組みが全国規模、地球規模の課題解決の成否を握っているといっても過言ではありません。



環境



人権



健康



教育



地域



住み続けられるまちづくりを
 都市には、人口、経済活動、社会的・文化的な交流が集中しており、日本においては少子高齢化、地域人口減少と地域経済縮小といった持続可能性の問題が生じています。国は、こうした課題に対して、2050年を見据えた長期的な国土づくりの理念や考え方を示した「国土のグランドデザイン2050」の中で、**多様性（ダイバーシティ）、連携（コネクティビティ）、災害への粘り強くなやかな対応（レジリエンス）**を重視し、**多様なステークホルダー**とともに取り組むこととしています。
 また、一方で**地方創生SDGs**では、**くらしの基盤の維持・再生**を図り、**持続可能なまちづくり**や**地域活性化**の取り組みをスピード感を持って進めるためにSDGsの考え方を利用しています。

Think Globally, Act Locally.



環境



人権



健康



教育



地域

SDGs 3.4,3.5,4,8.6,10.2,11.3,11.7,11.a,11.b
GRI 102-55,413

ミッション

サッカーファミリーが連携して
幅広い視野で地域の課題を解決する

目標

防災・減災とよりよい復興

JFAグリーンプロジェクト

フードドライブ

JFAハウスの地域への貢献

ハイライト

JFAでは、東日本大震災や熊本地震などにおいて、被災地の一日も早い復興を願って、サッカーを通じた復興支援活動を実施してきた。募金活動やチャリティーオークションを実施し、被害を受けた施設の復旧工事等に拠出している。

2022年には、「復興支援委員会」を「防災・復興支援委員会」へ改称し、SDGsの11番のゴールである「住み続けられるまちづくりを」のターゲットとして示されている「仙台防災枠組2015-2030」を念頭に、事後からの復興支援から、事前からの防災・減災をミッションに加え、サッカーのコミュニティやつながりを生かした取り組みを始めている。

JFAグリーンプロジェクトにおいては、サッカー施設整備助成事業により各地域にフットボールセンター等の拠点を整備しているほか、パートナー企業の協力も得ながらオンラインサロン／施設づくり情報交換会の開催や施設づくりのガイドブック発行などを行った。ポット苗方式芝生化モデル事業においては、芝生の苗を無償で提供し、全国各地の芝生化を推進。地域コミュニティの発展に貢献している。

主な指標

防災・減災の取り組み

サッカー日本代表戦会場での啓発 **2**回

JFAグリーンプロジェクト

ポット苗方式芝生化 **15**か所 **84,670**m²

今後に向けて

防災・減災の取り組み・備え、災害直後の迅速な対応
施設づくりの動き方ガイドブックを活用した施設整備の推進支援

がんばろうニッポン!

サッカーファミリーのチカラをひとつに!

JFA X 防災 アスパス!



防災・復興支援委員会の巻誠一郎委員長と国崎信江委員（危機管理教育研究所）により、サッカー日本代表の試合会場において、「防災」をテーマにしたブースを展開。地域の中での日頃からの災害の備えの大切さを学ぶことができる場を設けた。

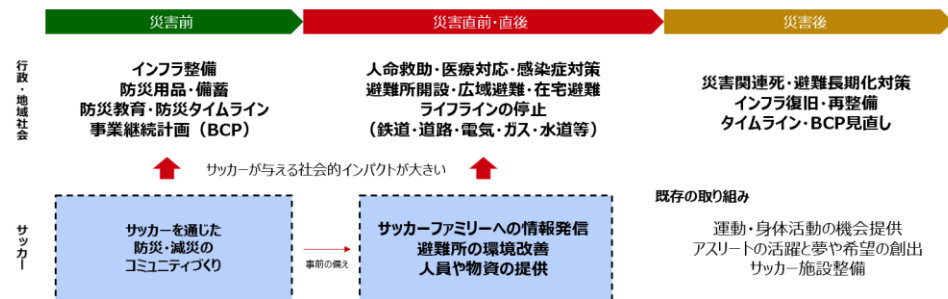
左：2023年10月13日 MIZUHO BLUE DREAM MATCH 2023 @ 新潟県デンカビッグスワンスタジアム
右：2023年10月17日 キリンチャレンジカップ2023 @ ノエビアスタジアム神戸



いつどこで起こるかわからない災害への備えをスポーツの力で!

復興支援の新しいストーリー

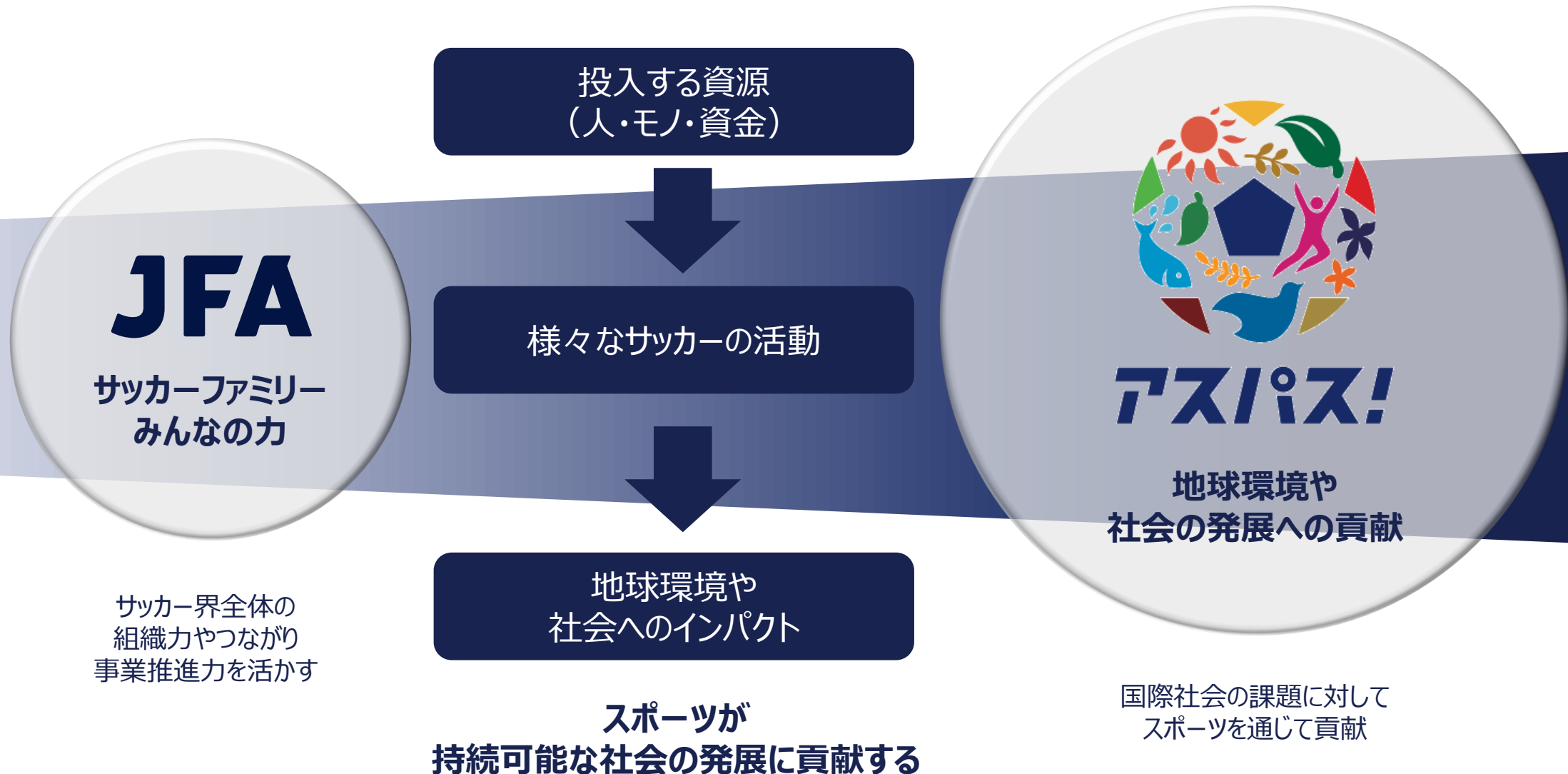
災害発生後の復興支援 + よりよい復興のための事前の防災・減災



サッカーを通じた防災・減災：これまで様々な取り組みが行われているが、JFA復興支援委員会として検討していなかった領域



サッカーの価値を可視化する・仲間を集める



サッカーの価値を可視化する

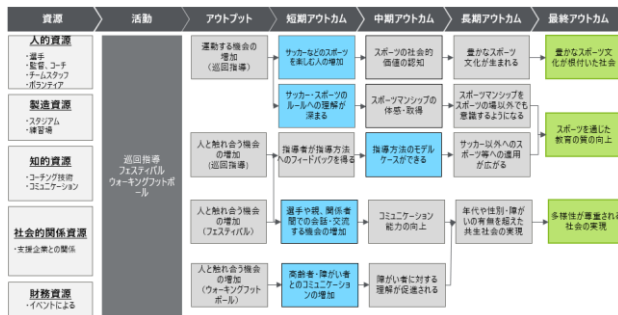
JFAの事業の成果を測り持続可能性を高める 社会的インパクト評価とSROI

JFAの活動に関する社会的価値分析

JFAの活動全体のうち、特にJFAの理念・ビジョンとの関連性が高い、強化・普及・社会貢献の各領域から、代表的な事業を選択し、JYDパートナー（当時）のデロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー合同会社の協力を得て、SROIの手法を用いてその社会的価値を分析した。データの取得範囲の制約があったため、今後、間接的・波及的効果の検討が行われることで、さらに網羅的に定量化できる余地があるが、現時点で算定可能な、定量的な社会的インパクトの評価・分析を行うことができた。様々なステークホルダーを巻き込んだ評価が継続して行われることにより、今後さらに透明性の高い効率的な事業運営を実施することができると考えられる。

普及事業における「ロジックモデル」の例

いくつかのマテリアル（重要）かつ測定可能なアウトカム（成果）の指標について評価を行った。



あくまでも今回の分析範囲において算定した数値となるため、実際には各事業においてより高い成果を生み出している可能性があります。

社会的価値分析の前提

- 分析対象
 - JFAが取り組む事業活動（日本代表戦、普及事業、U10-12リーグ、女子高校選手権、グリーンプロジェクト）について、社会的価値の分析を実施
- 分析手法：社会的投資収益率法 (Social Return on Investment)
- 分析期間：2022年1月から12月までの1年間 (日本代表戦は2019～2022年の4年間)
- 実施した手続き：
 - JFAの取り組む事業活動（日本代表戦、普及事業、U10-12リーグ、女子高校選手権、グリーンプロジェクト）に関するインタビューおよびロジックモデルの構築
 - 一部のアウトカムに関するアンケートの実施
 - その他実績等に関するデータはJFAが提供したデータおよび公開情報を使用

分析結果の考察

- 日本代表戦**：ワールドカップの開催を通じ幅広い人々に、普段の生活でのモチベーション向上等の価値をもたらしたことにより、SROIは3.4倍となった。
- 普及事業**：ボランティア活動を通じて参加者が得られる価値などが一部可視化できなかったものの、SROIは2.0倍となった。
- U10-12リーグ**：生活圏でのリーグを通じて、子どものみならず、家族関係の改善等にも影響が見られることから、SROIは3.4倍と比較的高い値となった。
- 女子高校選手権**：女子サッカーの認知度向上や、高校生の人間関係構築につながるなどのインパクトが大きく、SROIは2.3倍となった。
- グリーンプロジェクト**：サッカー施設整備に関するインパクトが可視化された一方で、そこから派生的に生じる施設利用者間におけるコミュニティ促進に関する価値の可視化などが困難であったことから、SROIは1.2倍にとどまった。

仲間とつながる



価値共創を推進する新しいパートナーシッププロジェクト JFA Partnership Project for DREAM

CONCEPT コンセプト

サッカーを通じて繋がった仲間たちが社会課題を起点に共創し、サッカーファミリーや世の中に対してポジティブなインパクトを生み出す取り組みを行います。



実践例



新たなパートナーシップ制度、価値共創活動推進に向けたパートナー企業とのワークショップを開催

日本サッカー協会（JFA）は5月11日（木）、今春に刷新した新たなパートナーシップ制度「JFA PARTNERSHIP PROJECT for DREAM」でコンセプトとして掲げている「価値共創活動」の推進に向け、パートナー企業と共に初めてのワークショップを開催した。会場の高円宮記念JFA夢フィールドには各社から合わせて約40名の方々にお集まりいただき、交流や意見交換を行った。

第一部ではパートナー企業の参加者に加わり、スペシャルゲストとして元SAMURAI BLUE（日本代表）の福西崇史さん、坪井慶介さん、播戸竜二さん、元なでしこジャパン（日本女子代表）の海堀あゆみさん、原菜摘子さんがウォーキングフットボールをプレーし、パートナー企業の皆様との交流を深めた。

続く第二部ではJFA専務理事の宮本恒靖より、新しい日本代表のスローガン「夢への勇気を。」や今回のパートナーシップ制度にける想いをお話し、パートナーシップ制度の概要や、JFAが考える価値共創活動のコンセプトである『三方良し』について説明した。また海外の事例も共有しながら、事前のアンケートで要望が多かった取り組み後の効果測定方法など、今後の活動推進につながる情報を参加者で共有した。第二部からは北澤豪さんも参加し、グループディスカッションも行った。

▶ JFA Partnership for Dream
<https://www.jfa.jp/partnership/>



仲間とつながる



サッカーファミリーの夢をつなぐクラウドファンディング JFA CROWD FUNDING つながれみんなの夢へ。



JFAと、国内最大級のクラウドファンディングサイトを運営する株式会社CAMPFIREは2023年9月20日、「JFAサポーター契約」を締結し2023年12月6日より新たに「JFAクラウドファンディング」サービスを開始した。

本事業は、JFAとCAMPFIREの「JFAサポーター契約」に基づく事業の一環で開始するもので、JFAがプロジェクトを起案し、多くの支援者（団体・個人）を募って事業を実行するほか、JFAがプラットフォームとなり、47都道府県サッカー協会や各種連盟、関連団体、チーム・スクール、サッカー関連事業者（イベント・施設）、あるいは選手・指導者・審判員といった個人などにクラウドファンディングの場を提供することでサッカーファミリーの皆さんが活用できるサービスを広げていくものである（運営協力：CAMPFIRE）。

JFAとCAMPFIREは、サッカーに関わる多くの人々の夢や挑戦を応援したいとしており、2024年の年末までの1年間でサイト上の支援総額10億円、起案数350件を目指す。本事業を通して、今まで「資金がない」「仲間がいない」と諦めていた人にとって取り組みに挑戦するチャンスになることを期待している。

本事業の認知度アップと支援の輪を広げていくために、元サッカー日本代表でJFAアスリート委員会の委員を務める播戸竜二さんと2004年アテネオリンピック日本代表に名を連ね、現在、Youtuberとして活動する那須大亮さん、プロサッカー選手でJFAアスリート委員会委員の川澄奈穂美さんに「JFAクラウドファンディングアンバサダー」を務めていただく。

実践例



JFAは2020年に千葉県千葉市に代表チームの強化拠点となるJFA夢フィールドを建設した。天然芝2面、人工芝ピッチ、フットサルアリーナ、ビーチサッカーピッチ（通称、ピッチ・カリオカ）を持つこの施設は、各カテゴリーの代表チームがトレーニングを行うほか、レフェリーらも日々のトレーニングで利用している。

天然芝のピッチは、選手が最高のコンディションでトレーニングができるよう手入れされており、年間30～40tもの芝が刈り取られている。現在、刈り取られた芝は廃棄されているが、これに樹脂を練りこむことによって新たな素材に生成される。

そこで、この技術を利用して天然芝を「グリーンカード」（※）に生まれ変わらせる事業をクラウドファンディングを活用して実施。この技術で作られたグリーンカードを全国各地で活動するチームなどに配布し、フェアプレー、リスペクトを推し進めるとともに、廃棄物を有効活用することで循環型のサイクルの確立を目指す。

※グリーンカード：U-12（4種）年代以下の大会や試合などで導入しているもので、リスペクトあるプレーや行動をした選手らに対してグリーンカードを提示しフェアプレーやリスペクト精神を広げていこうというもの。

▶ JFAクラウドファンディング

https://www.jfa.jp/about_jfa/news/00033





ESGデータ集（GRI対照表）

https://www.jfa.jp/about_jfa/esg_data.html



開示事項	分類	ID	報告要求事項	内容	関連ページ
102 一般開示事項	1.組織のプロフィール	102-1	組織の名称	公益財団法人日本サッカー協会（JAPAN FOOTBALL ASSOCIATION）	組織概要
		102-2	活動、ブランド、製品、サービス	日本サッカー界を統括し代表する団体として、サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献することを目的としている。 公益財団法人の公益目的事業として、サッカー普及振興事業を行っており、日本代表関連事業、競技会開催事業、指導普及事業、社会貢献事業、ミュージアム運営事業、災害復興支援事業、JFAナショナルフットボールセンター事業を行っている。また、収益事業としてJFAハウスの賃貸事業、その他の事業として登録・オンラインシステム関連事業を行っている。	JFAの概要 定款第3条 事業計画・事業報告
		102-3	本社の所在地	主たる事務所：〒112-0004 東京都文京区後楽1丁目4-18 トヨタ東京ビル	組織概要
		102-4	事業所の所在地	日本国内に2ヶ所の事務所（JFAハウス、JFA夢フィールド）を設け、他に4ヶ所のJFAアカデミー（福島、熊本宇城、堺、今治）と1ヶ所のJFAメディカルセンター（福島）を設置している。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：施設・拠点
		102-5	所有形態および法人格	公益財団法人 （一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（法人法）に基づく一般財団法人であり、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律（認定法）に基づきサッカー普及振興事業を公益目的事業と位置付けて公益法人としての認定を受けている。）	組織概要
		102-6	参入市場	日本国内及び海外で活動する公益・非営利セクターで、サッカーを愛する仲間（サッカーファミリー）を対象に事業を実施している。	定款第4条第2項 事業計画・事業報告
		102-7	組織の規模	総従業員数：257人（正職員204人、臨時雇用職員53人含む）※2023年12月1日時点 総事業所数：3ヶ所（JFAハウス、JFA夢フィールド、JFAメディカルセンター）※関連施設：JFAアカデミー4ヶ所	価値創造ストーリー：ひと目で分かるJFA
		102-8	従業員およびその他の労働者に関する情報	正職員：204人（男性137人、女性67人（33%））臨時雇用職員：53人（男性10人、女性43人（81%）） ※2023年12月1日時点 ※従業員はJFAハウス、JFA夢フィールド、JFAメディカルセンターの3ヶ所にて就業している。	価値創造ストーリー：ひと目で分かるJFA
		102-9	サプライチェーン	日本代表関連事業：日本代表の強化、日本代表戦の開催のために、日本代表選手／所属クラブ、旅行会社、各種用具、トレーニング施設、スタジアム、主管協会等が関係している。 競技会開催事業：各種競技会開催のために、スタジアム、主管協会、運営スタッフ等が関係している。 指導普及事業：選手育成、指導者養成、審判関連、広報関連事業のために、トレーニング施設、会議室、指導者、審判員、印刷会社等が関係している。 社会貢献事業：各種社会貢献事業実施のために、各種パートナー等が関係している。	価値創造ストーリー
		102-10	組織およびそのサプライチェーンに関する重大な変化	2020年に千葉県に「高円宮記念JFA夢フィールド」を開設した。	高円宮記念JFA夢フィールド
	102-12	外部イニシアティブ	国連グローバル・コンパクト（2009年7月）、寄付月間（2015年）、政府「子供の未来応援国民運動」（2019年5月）、ユニセフ「子どもの権利とスポーツの原則」（2019年6月）、国連グローバル・コンパクト、UN Women「女性のエンパワーメント原則」（2020年10月）	価値創造ストーリー：日本中に、そして世界に広がるパートナーシップ	
	102-13	団体の会員資格	国際サッカー連盟（FIFA）、アジアサッカー連盟（AFC）、東アジアサッカー連盟（EAFF）、日本スポーツ協会（JSPO）、日本オリンピック委員会（JOC）にサッカー競技団体として唯一加盟している。	JFAの関連組織図	
	2.戦略	102-15	重要なインパクト、リスク、機会	（中期計画参照）	中期計画
	3.倫理と誠実性	102-16	価値観、理念、行動基準・規範	JFAの理念：サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。 JFAのビジョン：サッカーの普及に努め、スポーツをより身近にすることで、人々が幸せになれる環境を作り上げる。サッカーの強化に努め、日本代表が世界で活躍することで、人々に勇気と希望と感動を与える。常にフェアプレーの精神を持ち、国内の、さらには世界の人々との友好を深め、国際社会に貢献する。	価値創造ストーリー
		102-17	倫理に関する助言および懸念のための制度	暴力等根絶窓口、内部通報制度等を設けている。	暴力等根絶相談窓口 内部通報者保護規則

開示事項	分類	ID	報告要求事項	内容	関連ページ
4.ガバナンス	4.ガバナンス	102-18	ガバナンス構造	サッカー競技を統括する唯一の団体としての社会的責任をふまえ、FIFA標準規約に基づき、立法（評議員会）・司法（規律委員会・裁定委員会・不服申立委員会）・行政（理事会）の独立した3つの機関による三権分立の体制を導入。理事会のもとに、各種委員会を設置し、理事会の諮問に対して答申し、所管事業を実施している。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制
		102-19	権限移譲	定款及び事案決裁規則等に基づき、役員、事務局へ権限移譲を行っている。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制 事案決裁規則
		102-22	最高ガバナンス機関およびその委員会の構成	法令及び定款に基づき、評議員会は役員等の選任・解任等を行い、理事会は法人の業務執行の決定、理事の職務執行の監督等を行っている。評議員は、理事、監事、職員、司法機関又は常設委員会の委員を兼ねることが禁止されており、業務執行権を有さず、独立性が確保されている。任期は4年で、79団体から1名ずつ推薦され、選任されている。現在、女性評議員は3名。役員は任期2年で、30名中男性25人、女性5人となっている。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制 定
		102-23	最高ガバナンス機関の議長	評議員会の議長は、評議員の中から選出することとなり、組織の業務執行を行う者と兼ねることはない。	評議員及び評議員会規則
		102-24	最高ガバナンス機関の指名と選出	代表理事である会長、副会長、専務理事、常務理事は、評議員会で予定者を選出し、理事会で選定する方法で決定している。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制
		102-26	目的、価値観、戦略の設定における最高ガバナンス機関の役割	理念、ビジョン、中期計画は、理事会が決定している。	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制
	5.ステークホルダー・エンゲージメント	102-40	ステークホルダー・グループのリスト	(関連組織図参照)	価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：ガバナンス体制
6.報告実務	102-52	報告サイクル	年次	このレポートについて (P8)	
	102-53	報告書に関する質問の窓口	お問い合わせ窓口に記載の代表電話、WEBフォーム。	JFA組織概要	
	102-54	GRIスタンダードに準拠した報告であることの主張	この報告書は、GRIスタンダードの中核 (Core) オプションに準拠して作成されている。		
	102-55	内容索引	このGRIスタンダード対照表 ※スタンダード外の項目は、末尾に記載している。		

開示事項	分類	ID	報告要求事項	内容	関連ページ
200 経済	201 経済パフォーマンス	201-1	創出、分配した直接的経済価値	(本レポート上の関連ページおよびJFA公式サイト上の最新データ参照)	価値創造ストーリー：ひと目で分かるJFA
		201-4	政府から受けた資金援助		日本スポーツ振興助成事業報告 競技力向上事業補助金・選手強化NF事業一覧
	203 間接的な経済インパクト	203-1	インフラ投資および支援サービス		価値創造ストーリー：社会の発展への貢献：施設・拠点
300 環境	302 エネルギー	302-1	組織内のエネルギー消費量		重要課題：環境 (P10)
	303 水と排水	303-1	共有資源としての水との相互作用		
	305 大気への排出	305	温室効果ガス (GHG) 排出量 (スコープ1~3)		
	306 廃棄物	306-2	種類別および処分方法別の廃棄物		
400 社会	401 雇用	401-1	従業員の新規雇用と離職	重要課題：教育 (P25)	
	404 研修と教育	404-2	従業員スキル向上プログラムおよび移行支援プログラム		
	405 ダイバーシティと機会均等	405-1	ガバナンス機関および従業員のダイバーシティ		重要課題：人権 (P15)

パートナーシップ・国際イニシアチブ

https://www.jfa.jp/about_jfa/value_creation_story/organisational_basis.html



常にフェアプレーの精神を持ち、国内の、さらには世界の人々との友好を深め、国際社会に貢献する。



ヨーロッパ

- イングランドサッカー協会
- ロシアサッカー連合
- ベルギーサッカー協会
- ドイツサッカー連盟
- スペインサッカー連盟
- フランスサッカー連盟
- デンマークサッカー連盟
- FCバイエルン・ミュンヘン

中央アジア

- ウズベキスタンサッカー連盟
- イランサッカー連盟

東アジア

- モンゴルサッカー連盟
- チャイニーズ・タイペイサッカー協会
- 香港サッカー協会

西アジア

- オマーンサッカー協会
- カタールサッカー協会
- ヨルダンサッカー協会
- UAEサッカー協会

東南アジア

- タイサッカー協会
- ベトナムサッカー協会
- インドネシアサッカー協会
- ラオスサッカー協会
- マレーシアサッカー協会
- シンガポールサッカー協会

南米

- 南米サッカー連盟
- ベネズエラサッカー連盟
- パラグアイサッカー協会
- アルゼンチンサッカー協会

日本国内

- 文京区
- さいたま市
- 日本サッカーを応援する自治体連盟
JFAこころのプロジェクト開催自治体
- 国立大学法人東京大学
- 国立大学法人東京藝術大学

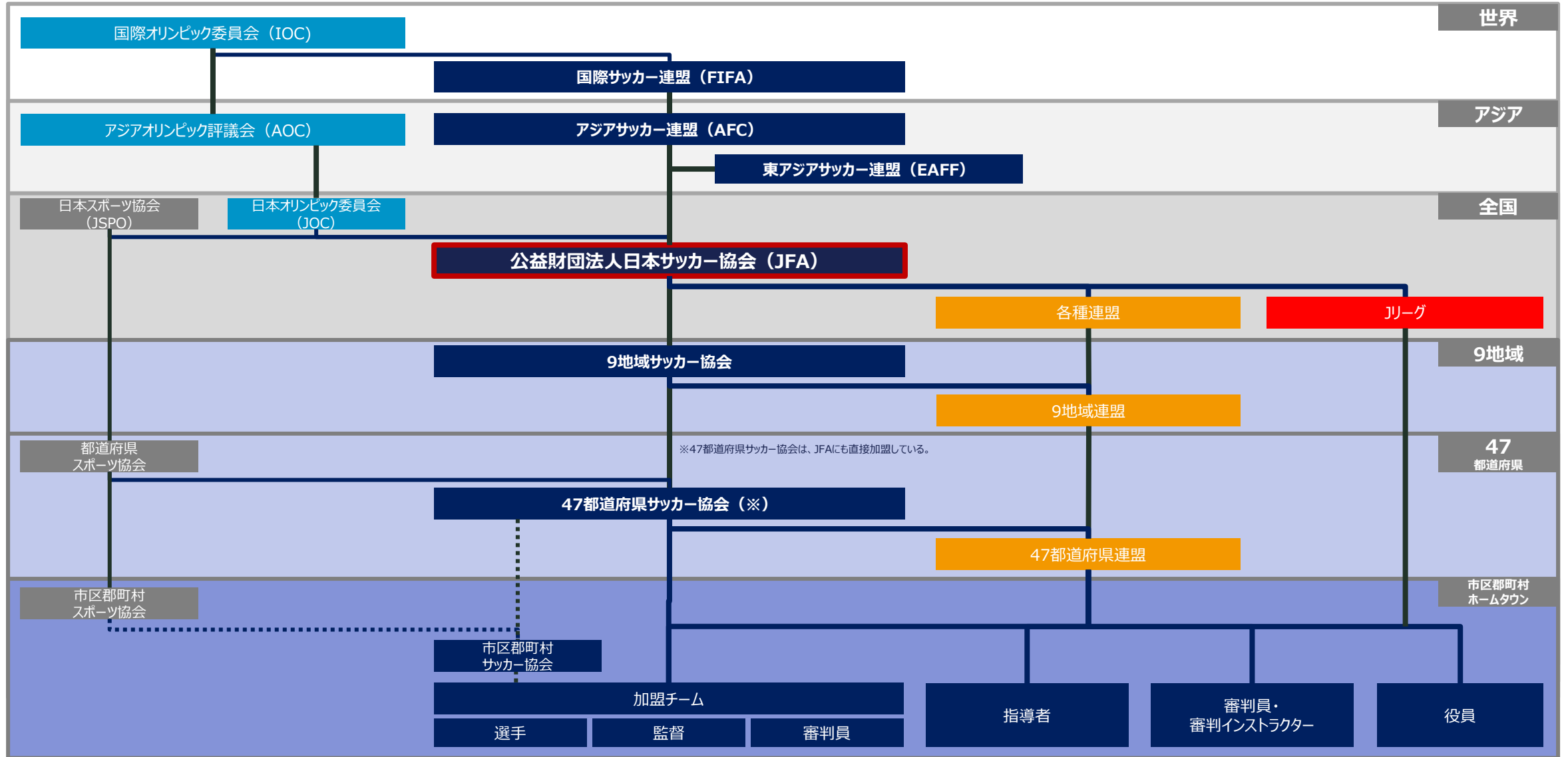
参画している主な国際イニシアチブや国際協力のためのパートナーシップ

- 国連グローバルコンパクト
- 国連児童基金（ユニセフ）
(子どもの権利とスポーツの原則)
- 国連女性機関
(女性のエンパワーメント原則)
- 国際交流基金
- 独立行政法人
国際協力機構（JICA）

全国的なキャンペーンへの協力

- 寄付月間
- 子どもの未来応援国民運動
- ピンクリボン運動

JFAの関連組織図





Appendix : 中期計画策定にあたっての各種補足情報



2. アクション・目標について : アスパス!

社会貢献やSDGsの達成につながる活動を「アスパス！」と総称し、「誰ひとり取り残さない」サッカー界の実現を目指す。

JFAが取り組む5つの重要課題

<p>環境</p> <p>自然や気候などの「外部環境」の保全</p>	<p>人権</p> <p>各種制度などの「内部環境」の整備</p>
<p>健康</p> <p>一人ひとりのニーズに合わせたサッカー環境の提供</p>	<p>教育</p> <p>サッカーを通じた健やかな人間形成・学びの提供</p>
<p>地域</p> <p>各者の協働による持続可能な活動展開</p>	

推進戦略の3つの柱

<p>JFA/加盟団体の行動変容</p> <p>JFAや加盟団体の主体的なSDGs活動の実行により、サッカー界全体で社会課題の解決に貢献</p>
<p>新たな領域への継続的な挑戦</p> <p>JFAが持つ影響力や組織力に外部の力を加えながら、スポーツ界の先駆者として社会課題解決に向けた新たなチャレンジを実行し続ける</p>
<p>パートナーとの共創</p> <p>パートナー企業とSDGsの共創を実現し、社内外に発信</p>

活動総称 : 「アスパス！」



モチーフ

サッカーボール、地球、地球の生き物や環境、SDGs カラーイメージ
地球でできたサッカーボール その関係は切り離せない 私たち人間、動物、環境など全てが丸、チームとなって明日を作っていくイメージ

社会貢献委員会



委員会の種類	専門委員会（各種委員会運営規則第3条に基づき設置）
設置	2016年3月～2024年3月
所管事項	社会貢献に関する事項
委員長	日比野 克彦 国立大学法人東京藝術大学学長
開催日程	2022年7月20日、9月30日 2023年1月19日、2月16日、12月25日 （計5回、オンラインで開催）
主な活動	東京藝術大学との連携 国連グローバル・コンパクト活動 寄付月間 子供の未来応援国民運動 子ども宅食プロジェクト ほか



BLUE PEACE DAYS (2019年)

https://www.jfa.jp/national_team/u22_2019/bluepeacedays/



アスパス JFAサステナビリティレポート2022-23

Thank you.

